

# 平成19年度病害虫発生予報第2号

平成19年4月26日  
鳥取県病害虫防除所

## 予報の概要

| 区分   | 農作物名 | 病害虫名                                     | 発生時期                      | 予想発生量                     |            |
|------|------|--|---------------------------|---------------------------|------------|
| 普通作物 | イネ   | 苗立枯病<br>ばか苗病<br>イネミズゾウムシ                 | やや早い                      | 平年並<br>やや少ない<br>やや少ない     |            |
| 果樹   | ナシ   | 黒斑病<br>黒星病<br>赤星病<br>クワコナカイガラムシ<br>カメムシ類 | 平年並<br>平年並<br>平年並<br>やや早い | 平年並<br>平年並<br>平年並<br>平年並  |            |
|      |      | カキ                                       | 灰色かび病                     | 平年並                       | 平年並        |
|      |      | ブドウ                                      | 灰色かび病                     | 平年並                       | 平年並        |
|      |      |  | べと病                       | 平年並                       | 平年並        |
| 野菜   | ネギ   | べと病<br>さび病<br>ネギハモグリバエ<br>ネギアザミウマ        | 平年並<br>平年並<br>平年並<br>やや早い | 平年並<br>平年並<br>平年並<br>やや多い |            |
|      |      | スイカ                                      | 菌核病<br>つる枯病               | 平年並<br>平年並                | 平年並<br>平年並 |
|      |      |  | スイカ・メロン                   | アブラムシ類<br>ハダニ類            | 平年並<br>平年並 |
|      |      | タバコ                                      |                           | 黄斑えそ病                     | 平年並        |

## [参考]

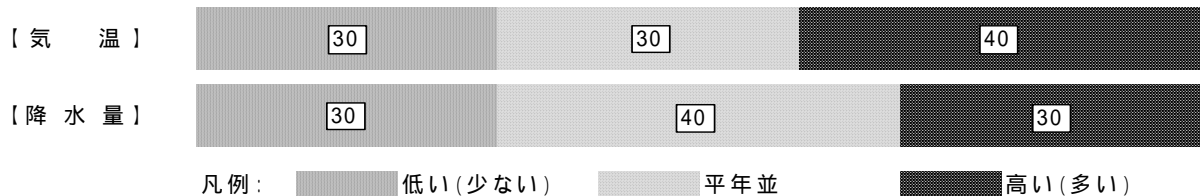
### 気象予報（抜粋）

1か月予報（4月21日～5月20日：4月20日、広島地方气象台発表）

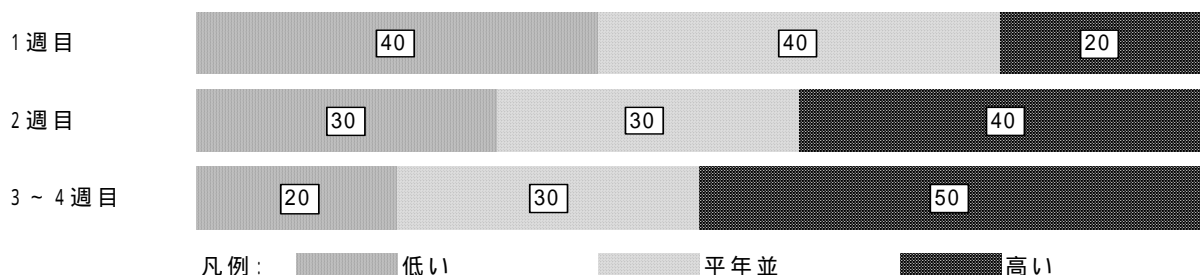
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%) >



< 気温経過の各階級の確率(%) >



## 普通作物

### [イネ]

#### 1 苗立枯病

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

気象予報によると、平年並の発生が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 予防防除を基本とし、主要農作物病害虫防除指針等を参考にして防除を行う。

イ 近年、リゾプス属菌やトリコデルマ属菌による苗立枯病の発生が見られるので、育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。

ウ リゾプス属菌による苗立枯病が発生した場合には、発病部分の回復は見込めないが、緑化期(但し、は種 14 日後まで)までであれば、直ちに薬剤をかん注することにより、蔓延を防止できる。

エ ムレ苗が発生した場合には、薬剤防除を行うとともに、夜間の保温と昼間の遮光に努め、回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

#### 2 ばか苗病

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや少ない

##### (2) 予報の根拠

昨年の本病の発生はやや少ない状況であり、種子の保菌率はやや少ないものと思われる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 種子消毒剤による浸漬処理は、以下のことを十分注意して行う。浸漬処理時の薬液量の不足、あるいは低温時の処理で効果が低下するので、十分な薬液量を確保し、液温は 10 以上を確保する。消毒後の浸種は停滞水中で行い、水の交換は原則として最初の 3 日間を行わない。なお、水温が高い場合など酸素不足になるおそれがあるときは静かに換水する。

イ ばか苗病と苗腐敗症(もみ枯細菌病菌)等の細菌病及びイネシンガレセンチュウは、防除薬剤の混用による種子消毒で同時防除が可能であるが、その場合には薬剤の濃度に注意して、浸漬処理を行う。

ウ 温湯消毒では、温度・浸漬時間等を誤ると防除効果や種子の発芽率が低下する。また、保菌率の高い種子では、十分な効果が得られないので、必ず種子更新を行う。

エ 育苗期間中にばか苗病による徒長苗がみられた場合には、直ちに抜取り、本田に移植しないように注意する。

#### 3 イネミズゾウムシ

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 やや早い

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 4月22日現在、予察灯(鳥取市橋本)への飛来は確認されていない。
- イ 4月22日現在におけるイネミズゾウムシの飛翔に必要な有効積算温量から、発生時期はやや早いと予想される。
- ウ 前年の第1世代成虫の予察灯への誘殺数は平年と比較してやや少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

近年、育苗箱に施薬されていない場合は、甚大な被害が見られるほ場が多い。育苗箱施薬による防除効果が高いため、使用時期および使用量を守り1箱ずつ丁寧に薬剤を施用する。特に、箱当たりの施薬量が不足すると著しく防除効果が低下するので注意する。

## 果 樹

### [ナ シ]

#### 1 黒斑病

(1) 予報の内容

|      |     |
|------|-----|
| 発生時期 | 平年並 |
| 発生量  | 平年並 |

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場における4月中旬の孢子飛散数は、平年を下回った。
- イ 本年のナシ園における病芽および枝病斑などの越冬菌密度は、全般的に平年に比べて低いが、一部のナシ園では、越冬菌密度がやや高い園が認められる。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 小袋掛け終了までの薬剤散布の間隔は5~7日程度とし、特に小袋掛け直前の防除を徹底する。
- イ 薬剤はベルコートフロアブル1,500倍液、ユニックス顆粒水和剤47の1,500倍液または有機銅フロアブル1,000倍とポリオキシソルボンA水和剤1,500倍の混用液などを使用する。
- ウ スピードスプレーヤーによる防除地域では、往復走行または縦横走行による散布を行い、散布むらがないように注意する。

#### 2 黒星病

(1) 予報の内容

|      |     |
|------|-----|
| 発生時期 | 平年並 |
| 発生量  | 平年並 |

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場における4月中旬の果そう基部病斑からの分生子の飛散数および病落葉からの子のう胞子の飛散数は平年を下回った。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 病原菌は多湿条件を好むため、降雨が続くと、本病が発生しやすい。
- イ 伝染源となる果そう基部の病斑を早めに切り取る。
- ウ 薬剤は、落花期にE B I水和剤(スコアまたはマネージ)4,000倍とジラム・

チウラムフロアブル（ダイボルトまたはパルノックス）500倍の混用液、摘果期にベルコートフロアブル1,500倍液、ユニックス顆粒水和剤47の2,000倍液などを散布する。

### 3 赤星病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 4月18日時点でビヤクシン上の冬孢子堆の成熟度は100%であり、小生子の形成開始時期はほぼ平年並であった。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、落花期にEBI水和剤（スコアまたはマネージ）4,000倍とジラム・チウラムフロアブル（ダイボルトまたはパルノックス）500倍の混用液などを散布する。

イ 例年発病の多い園または初期病斑が多く認められた園では、5月上～中旬にEBI水和剤などを追加散布する。

### 4 クワコナカイガラムシ

#### (1) 予報の内容

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 4月23日現在、越冬卵のふ化（平年：4月30日）は認められていない。

イ 前年度、本害虫による果実被害は平年並であった。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 昨年被害の多かった園では、必ず2回の防除を行う。特に、越冬世代は、第1世代および第2世代よりふ化時期が揃いやすいので防除を徹底する。

イ 多発園では、1回目の防除はふ化最盛期、2回目はふ化終期とする。なお、防除時期は、今後発表する病害虫発生予察指導情報を参照する。

ウ 薬剤はスプラサイド水和剤1,500倍液またはアプロード水和剤1,000倍液などを使用する。

### 5 カメムシ類

#### (1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 県内におけるクサギカメムシの越冬成虫数は平年並であった。

イ 予察灯では、平年よりやや早い4月中旬に初誘殺が認められた。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 越冬成虫のナシ園への飛来時期は5月中旬頃までと予想されるので、山間地、民家近くのナシ園で、例年発生が認められる園では、幼果期の防除が必要である。

イ 摘果期～小袋掛け期の幼果を加害するので、この時期に果樹園への飛来が認められた場合、直ちにジノテフラン水溶剤（アルバリンまたはスタークル顆粒水溶剤）2,000倍液などを散布する。

## [カキ]

### 1 灰色かび病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温・多湿条件を好むため、天候不順が続くと、本病が発生しやすい。  
また、強風などによって若葉が傷ついた場合に突発的に発生しやすい。

イ 西条、伊豆などの品種では、本病の発生が多い傾向にある。

ウ 防除薬剤は、ゲッター水和剤1,500倍液、オンリーワンフロアブル2,000倍液などを散布する。

## [ブドウ]

### 1 灰色かび病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温・多湿条件を好むため、開花期が天候不順になると、本病が発生しやすい。

イ 開花前～落花後にパスワード顆粒水和剤1,500倍液、スイッチ顆粒水和剤3,000倍、ゲッター水和剤1,500倍液、ポリベリン水和剤1,000倍液、ロプラール水和剤1,500倍液およびロプラールくん煙剤500g/10aなどのいずれかを使用する。

ウ デラウェアでは、ジベレリン処理前5日間と処理後3日間は薬剤散布できないので注意する。

エ 施設栽培では多湿条件が続くと発病が多くなるので、早朝の換気を行って施設内の湿度を下げるようにする。

### 2 ベと病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 開花期が天候不順になると、本病が発生しやすい。

- イ 薬剤は、展葉6～7枚にアリエッティC水和剤800倍液、落花後（小豆大）にアミスター10フロアブル1,000倍液またはストロビードライフフロアブル2,000倍液などを使用する。
- ウ 発病果、病葉は見つけ次第、取り除いておく。

## 野 菜

### [ネギ]

#### 1 ベと病

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

- ア 4月下旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は認められていない。
- イ 本病は、15位で降雨が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、平年並の発生が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病後の蔓延は早いので初期防除に努める。
- イ 薬剤はアリエッティ水和剤800倍液、フェスティバルC水和剤1,000倍液などを予防散布する。発病を認めたら直ちにリドミルMZ水和剤1,000倍液などを散布する。

#### 2 さび病

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

- ア 4月下旬現在、春ネギでは本病の発生時期および発生量はほぼ平年並となっている。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、夏ネギ、秋冬ネギにおいても平年並の発生量が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤防除は、孢子飛散がはじまる4月下旬頃からオンリーワンフロアブル1,000倍液、パイレトン乳剤1,000～2,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを散布する。
- イ すでに発病がみられている場合は、パイレトン乳剤またはラリー乳剤にカリグリン800倍液などを混用散布する。
- ウ なお、べと病の発生もみられる場合は、アミスター20フロアブル2,000倍液などを散布する。

#### 3 ネギハモグリバエ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、現地調査ほ場において、本害虫の発生は見られていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生にやや助長的であり、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本圃生育中のネギに対しては、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

イ 苗の定植時には、オンコル粒剤5の3~6kg/10a、ジノテフラン粒剤(アルバリンまたはスタークル)6kg/10aの株元散布またはアクタラ粒剤5の6~9kg/10aの作条混和などの処理をする。

ウ 地床育苗では、草丈20cm未満の苗でハモグリバエによる被害の影響が特に大きいので、5月上旬までに薬剤防除を徹底する。薬剤はガゼット粒剤

3~6kg/10a、アドバンテージ粒剤3~6kg/10aの株元散布、またはジメトエート粒剤6kg/10aなどを作条施用する。

4 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、現地調査ほ場において、本害虫の発生が散見される。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生にやや助長的であり、平年に比べてやや多い発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本圃生育中のネギに対してはマラバッサ乳剤800~1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

イ 苗の定植時および育苗期の防除については、ネギハモグリバエの項に準じて行う。

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、一部の現地ほ場において本病の発生が散見されている。

イ 本病は、15~20位で多湿条件が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。咲き終わった花弁は早く摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、ジマンレックス水和剤600倍液、スミブレード水和剤2,000倍液、カンタスドライフロアブル1,000~1,500倍などを散布する。

ウ 曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックス、ロブラールなどのくん煙剤を使用する。

## 2 つる枯病

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、平年並の発生が見込まれる。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。

イ 本病は株元を中心に発病が始まるので、株元にも薬液が十分かかるように散布を行う。薬剤は、ジマンダイセン水和剤400～600倍液、ジマンレックス水和剤400～600倍液、アントラコール顆粒水和剤400～600倍液、ダコニール1000の700～1,000倍液などを散布する。

## [スイカ・メロン]

### 1 アブラムシ類

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 4月20日現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）における黄色水盤への有翅アブラムシ類の誘殺数は平年並である。

イ 4月下旬現在、ハウス栽培スイカにおけるアブラムシ類の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生にやや助長的であり、平年に比べやや多い発生が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 初発生に注意し、初期防除を徹底する。

ウ スイカのハウス栽培では、交配前にはチェス水和剤3,000倍液などのミツバチへの影響のない薬剤を散布し、交配後はDDVP乳剤50の1,000～2,000倍液などを散布する。

エ スイカのトンネル栽培では、ツル引き誘引時期にチェス水和剤3,000倍液、交配1週間前にバリアード顆粒水和剤4,000倍液、着果後にDDVP乳剤50の1,000～2,000倍液などを散布する。

オ メロンでは、チェス水和剤2,000～3,000倍液、DDVP乳剤50の1,000～2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤3,000倍液などを散布する。

### 2 ハダニ類

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 3月下旬から4月の気温はほぼ平年並に推移しており、ハダニ類の畦畔部からの移動時期は平年並になると予想される。



イ 向こう1か月の気象予報によると、発生にやや助長的であり、平年に比べやや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア スイカでは、畦畔雑草に対して、4月下旬までにハダニ類に対して効果のあるハービー液剤などの除草剤を散布する。

イ ハウスなどですでに発生がみられる場合、薬剤の使用基準に従い、スイカ、メロンともに発生初期にニッソランV乳剤1,000倍液、バロックフロアブル2,000倍液などを散布する。多発した場合はコロマイト乳剤1,000倍液などを散布する。

ウ ミツバチ交配を行う前には、ニッソランV乳剤(ミツバチへの影響7日)の使用は避ける。

## [タバコ]

### 1 黄斑えそ病

(1) 予報の内容

|      |      |
|------|------|
| 発生時期 | 平年並  |
| 発生量  | やや多い |

(2) 予報の根拠

ア 本病を伝搬するアブラムシ類の発生時期は平年並で、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となるジャガイモの掘り残しイモを除去する。

イ ジャガイモは透明寒冷紗などで被覆栽培し、本病の伝染を防ぐ。

ウ タバコとジャガイモで同時期にアブラムシ類の防除を行う。薬剤は、タバコではベストガード水溶剤2,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液などを使用する。ジャガイモではベストガード水溶剤1,000~2,000倍液、ランネット45DFの1,000~2,000倍液、アドマイヤー水和剤1,000~3,000倍液などを使用する。

## [おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。  
詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。( <http://www.famic.go.jp/> )

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、  
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

### < 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

**アドレス** <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果やフェロモントラップ調査結果（シンクイムシ類）などの指導情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL：0857-53-1345、FAX：0857-53-5647

E-mail：boujyot@titan.oce.ne.jp

次回の予報発表は、5月10日（木）の予定です。